

長谷寺本堂の調査

この調査は、昨年3月3日の倒木で破損した屋根の修理を契機とし、その足場を利用し実施しました。考古・史料の研究員の協力^{むなふだ}を得て、屋瓦や棟札や、指図、文献史料などを調査し、『重要文化財 長谷寺本堂調査報告書』を刊行しました。

文献によれば、本堂は天文5年(1536)に焼失し、同7年には像高10m余の現本尊が造られました。それを覆う本堂は、大和郡山城に入った豊臣秀長によって天正16年(1588)に再興されました。その後、被災記事がないにもかかわらず、慶長12年(1607)の上棟など、本堂の造営記事が散見します。現本堂は、棟札から慶安3年(1650)の供養が明らかのため、秀長の建てた本堂を骨格として、慶安3年に完成したのが現本堂と考えられてきたのです。

しかし調査の結果、増改築を示す痕跡はほとんどなく、まったくの新築であることが判明しました。また、細部意匠を他の同時期の建築と比較すると、現本堂の年代は慶安年間頃に編年できます。棟札によれば、現本堂の造営には、将軍・徳川家光の援助を得て工匠には当時の天皇の御所造営をおこなった精鋭たちが招集されたことがわかります。筆頭棟梁と思われる今奥和泉守は、現在の東寺五重塔の棟梁でもありました。

すると、天正16年に豊臣秀長が建てた本堂の材料は、現本堂には使われなかったこととなります。豊臣家造営の本堂がわずか50年ほどで傷むとは考えられず、この造営には建築的問題とは別の、何らかの社会的な理由が潜んでいると思われます。

なお、調査成果の一部は、飛鳥資料館の企画展「豊山長谷寺本堂」(平成16年8月6日～31日)で公表し、棟札や指図、新出の文献史料など、本堂の写真をまじえて展示・解説しました。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 箱崎和久)



長谷寺本堂全景